

1) 題： 自己免疫性胃炎の自然史

結論：大規模な観察研究による、長期的結果に関する情報

原題：Miceli E et al. Long-term natural history of autoimmune gastritis: Results from a prospective monocentric series. *Am J Gastroenterol* 2024 May; 119:837.

(<https://doi.org/10.14309/ajg.0000000000002619>)

本文：

炎症を伴う胃萎縮（萎縮性胃炎）には、ヘリコバクター ピロリの慢性感染と自己免疫性胃炎（AIG）の 2 種類がある。慢性 H. ピロリ感染の患者は、胃腺がんの危険性が高くなるが、対照的に、AIG の患者はしばしば壁細胞に対する抗体を持っており、ビタミン B12 欠乏症に進展することがある。AIG は神経内分泌腫瘍（カルチノイドなど）の発生と関連しているが、AIG が胃がんの原因となるかどうかについては論争が続いている。

AIG の自然史を調べるため、イタリアの紹介センターの研究者らは、AIG 患者 498 名における平均 18 年の追跡調査について報告した。萎縮性胃炎の他の原因は除外し、内視鏡生検は 1 ～ 5 年ごとに施行された。AIG と診断される最も一般的な 2 つの根拠は、胃生検での偶発的な所見と貧血の調査だった。AIG の重症度は、0（壁細胞抗体があるが組織学的変化がない「潜在的 AIG」）から 4（異形成または神経内分泌腫瘍）までに分類された。AIG はほぼ進行性で、退縮することはなかった。23 名の患者が神経内分泌腫瘍を発症し（非転移性）、18 名の患者が上皮性異形成を発症したが、研究期間中に胃癌と診断されるものはなかった。

コメント：

胃癌がみられないのは追跡期間が不十分だったためかもしれないが、これらの結果は AIG による癌リスクが非常に低いことを示唆している。内視鏡による監視が AIG の進行を見極める唯一の方法だが、現在米国では、患者に胃がんの他のリスク要因がない限り、定期的な監視は推奨されていない。AIG の患者においてはビタミン B12 と鉄欠乏症について評価する必要がある、臨床医は他の自己免疫疾患の存在にも注意する必要がある。

担当：星野 潮

2) 題：コーヒーは血圧を上昇させ、また高血圧のリスクを高めるのか？

結論： コホート研究では、10 年間のコーヒー摂取で血圧に明らかな影響は見られなかった

原題： Trevano FQ et al. Habitual coffee consumption and office, home, and ambulatory blood pressure: Results of a 10-year prospective study. J Hypertens 2024 Jun; 42:1094. (<https://doi.org/10.1097/HJH.0000000000003709>)

本文：

カフェインは血管作動性化合物で、一時的に血圧 (BP) を上昇させる可能性があるが、習慣的なコーヒー摂取による心血管への影響に関するデータは様々である。イタリアの研究者は、1,400 人の血圧を調べる前向きコホート研究を行った。参加者は自己申告による毎日のコーヒー摂取量で 3 グループに分類された： (まったく飲まない、中程度 (1~2 杯)、多量 (3 杯以上))。研究者は、ベースラインと 10 年後において、各参加者のオフィス、自宅、および 24 時間歩行時の血圧測定値を収集した。ほとんどの参加者のコーヒー摂取カテゴリは、追跡期間中に変化しなかった。

3 つのグループは、ベースラインでは多少異なっていた。たとえば、コーヒーを多量に飲む人は若年で、喫煙率が高く、降圧剤の服用者は少なかった。これらの因子を調整したところ、唯一の有意な結果は、ベースラインと 10 年間の追跡調査で、コーヒーを頻繁に飲む人におけるオフィス収縮期血圧の平均値が、中程度のコーヒーを飲んだ人や飲まなかった人に比べてわずかに低かったことであった。外来および自宅での測定値は、どちらの時点でもグループ間で差はなかった。さらに 24 時間の血圧変動値と新規高血圧の発生率は、グループ間で差がなかった。

コメント：

これらの結果は、定期的なコーヒーの摂取が、血圧または新規高血圧に臨床的に意味のある差をもたらさないことを示唆している。患者は、毎日のコーヒー摂取の習慣が血圧に影響を与える可能性は低いと安心できる。さらに、最近の大規模な観察研究では、コーヒーの摂取は心臓不整脈の増加リスクと関連がないことも示唆された

担当：星野 潮